

地域文化に注目した 集落調査と復興支援

—川内村第七行政区(東山)での取り組み—

跡見学園女子大学地域文化研究会

調査事業のきっかけ

▶ きっかけは久保田幸男区長のことば

「夜寝る前に、ふと考えることがあるんです。あと10年たったら、いったいこの集落に、どれだけ人が住んでいるのかって。指を折って考えても、なかなか出て来ない。10年後には人がいないかもしれない……。」

▶ 震災の影響がとくに大きい浜通り地方では、ながく続いてきた集落の統合や消滅も現実的な問題になりつつある…。

目標：民俗学の視点を活かしながら 集落の記録を作る

- ▶ 民俗学とは、地域文化を研究する領域
そこで今回の調査事業では、社会組織・生業・冠婚葬祭の3つのテーマにから、震災前後の地域文化を記録することとした。
- ▶ したがって、学術調査中心の活動に。
- ▶ このような地域の文化的資源が、集落復興に寄与するという指摘もある。

江戸時代の社会組織

近世村[下川内村]

現在の大字下川内にあたる

組[東山組]

下川内村には、
町組・西山組・
東山組があった。

ヤシキ

原

東山

小田代

現在の社会組織

大字[下川内]

川内村は
上川内村
と下川内
村の合併
により誕
生。

行政区[第七区]

第一区から第八区
までである。

班

原

東山

小田代

川内村の社会組織の特徴

- ▶ 「班」が地域文化の担い手になっている。
一般的には、「班」組織は、近世の五人組に由来し、集落組織を支えるものであることが多い。
- ▶ 川内村の「班」はヤシキという独自の社会組織に由来。10戸から15戸程度の小さな組織であるが、共有地や共有資源をもち、また冠婚葬祭はこの単位を中心に行なわれてきた。
- ▶ 震災後には、ヤシキ単位の神社が維持困難に。

七区の生計を支える生業

- ▶ ～昭和50年ごろまで
山仕事・畑作(養蚕・タバコ)・稲作・牧畜の組み合わせ
- ▶ 昭和50年以降～震災前
稲作に特化し、また兼業農家に
- ▶ 震災後
稲作を行なう農家は80戸から5戸に。農地の集約化・
農作業の委託が進む。

七区の副次的生業（食の視点から）

▶ ～震災前まで

自給用の屋敷畑、山菜・キノコの採取、狩猟活動
そこで得られた産物を保存し、活かす食文化

▶ 震災後

放射能汚染の問題から、野山での採取は難しくなる。
田畑の近くななど管理された場で行なう。
食の豊かさ、生活の豊かさが失われる。

七区の婚姻儀礼

▶ ～昭和50年ごろまで

自宅で行なわれ、地域が準備など、さまざまな面で協力スキミという興味深い民俗も[ヤシキの若者たちが結婚式を覗き見する習俗。本来は婚姻儀礼が若者組の承認のもとに行なわれていたことを示す。]

▶ 昭和50年以降～震災前

結婚式場で行なうことが一般的になり、地域として、婚姻に関与することはなくなる。

七区の葬送儀礼

- ▶ ~昭和50年ごろまで
ヤシキごとにイツキ[一揆ないし、一忌とも]組合と無情講が編成され、葬儀に関するすべてを取り仕切る。地域で葬儀をあげる仕組みが成り立っていた。
- ▶ 昭和50年以降～震災前
土葬から火葬へ。また葬儀場を利用することも。
- ▶ 震災後
イツキが解散し、葬儀に地域が関与しなくなる。

震災がもたらしたものの

▶ 生活の豊かさを支えるため、「共」が担っていたものは「私」(=外部のサービス)に頼らざるを得ない状況。

公：行政

共：コミュニティ：地域文化

私：市場

▶ そうしたなかで、何とか「共」は存在し、長寿会(敬老会)など活性化するものもある。